

# 乳幼児の音楽的発達

—三才児までについて—



松 平 立 行

## 一、乳幼児の音楽的発達を知る必要性

昔から『音楽の教育は早くから行なわなければならない』といわれておりましたが、現在では『早教育という言葉が誤りであり、早くから音楽の教育を始めるのが普通である』と考えられるようになっております。したがって乳児・幼児の音楽的感覚がどのように発達するかを具体的に知ることは、1、発達に即して音楽教育を有効に行なうことと、2、狭い意味での教育開始時期を適確に知り、遅きに失しないとの二つの意味から必要といえるでしょう。

## 二、音楽的感覚について

広い意味では音感覚、(単一体としてされる音の高さ・強さ・長さ・音色・和音などに対する感覚)も含まれますが一般に音楽的感覚といわれるものは、音程感・リズム感・以上の両者をあわせたメロディ感・ハーモニー感・各種の音色による対比感・これらの記憶能力・音楽を聴いた時に起こる想像力・連想力・美醜感(好き、嫌いも必然的に入る)・表現力(身振り表現・歌唱表現・演奏表現)・読譜力(読譜により音を媒介しないで頭の中で旋律を作って音楽を感じる力||リーマンはこの状態を主観的鑑賞といっている||や、読譜によって表現する力)および作曲による表現などです。

乳幼児の音楽的発達後は後者の楽曲の享受から始まりますが、三

才児までに著しい発達を示します。

したがってこれらの発達期としての扱いを含めながら、乳幼児の音楽的発達を述べることに致します。ただここで付言しなければならぬことは、音楽芸術は他の空想芸術のように、自然の中に手本とし得るものがありません。したがって乳幼児のまわりに音楽的環境を設営することが必要となることです。

### 三、乳幼児の音楽的発達

生れてから発達する高等感覚のうち、聴覚の働きは最も早くはじまるようです。酒田富治氏はヘッツェルの実験を紹介して第一目に音がきこえた赤ん坊の例、さらにはベーターソンの調査により、生後一週間の嬰兒千人のうち、六六七人が可聴であったことなどを述べていられます。乳児が音に目覚めるのはこのように早いのです。しかしここでは私が観察した嬰兒の事例研究から、生後一か年までと三か年以後は紙面の都合上結果と配慮すべきことを、生後一か年から三か年の間はその事例を載せながら乳幼児の音楽的な発達を述べることに致します。

#### 1 生後三か月まで

音がきこえだしますと、気持ちのよい音楽や静かな音楽に対しては眠りに入ります。二か月頃には少しの間だけ鳴っているオルゴール・週期的に繰り返すようなオルゴールに対しては友情らしいもの

を持ち、話しかけるように感じられる面がでてきます。三か月一ぱいでも音楽を聴くと眠る状態は続きますが、騒音に対しては逆に眠りから覚め、なかなか眠れなくなります。すなわちこの間には、快い音楽あるいは静かな音楽をきかせるのが身体的な発達を促すのも良く、騒音をきかせると逆の悪い面がでるといえます。家へ大工さんを入れることなどは、この期間はもちろん、生後二か年ぐらいの間はできる限りさけるべきでしょう。

#### 2 四か月より一年まで

四か月頃から、音楽の奏でられる方を見るようになります。また大きな音を恐ろしがって泣きます。しかしこの恐怖感はこの期間にできるころには幾分薄らぎますが前述の三か月までは静かな音楽を聴かさなければならぬ理由の一つがこの点にもあるわけです。

八か月頃からは、歌いたい意欲がでてきます。さらに調子のよい音楽をきくと喜んで手を振りだします。また言葉と抑揚（旋律らしいもの）を覚えることもできるようになります。

十一か月になると、楽器に接したい気持ち（たたいて鳴らしたい気持ち）——まだ吹いて鳴らすことはできません——を持つようになります。この欲望が満たされると上気嫌になります。また簡単な歌の旋律で、自分の歌える範囲（一語文）を、その歌の中でタイミングよくいうことができるようになります。このことから簡単な旋律をききわける能力はもちろん、憶える能力もついているものと判断で

きます。したがって器楽曲の簡単な旋律ぐらひは憶えることができると考へるべきでしょう。以上の外に速い曲をも好みだしますので、聴かせる楽曲の種類も發達に即して多くかつ広げてゆかなければなりません。

しかし滿一年頃でも、音が、わりと大きいゼンマイの玩具の音には恐怖感を抱く児がありますから、大きな騒音のある所へ連れて行くことは避けるべきでしょう。

### 3 一年より一年六か月まで

前に述べました通り、以後の一年間は資料として具体的な事例をも列記してゆきます。なおこの事例で与えた刺激は、本人が望んでいると見なされたもの以外は与えず、強制的なことは何一つ致しませんでした。したがってこの事例は一人の子どもを自然の成長のま

まに觀察したものです。

#### 一年七日目 簡単な旋律を母親

の声で歌ってきかせたら、喜んでその通り模唱した。その旋律は採譜1および2である。

#### 同日 中山普平作曲「赤ちゃん」の旋律をピアノで弾くと、誰も

歌わないのに歌詞の「バァ」の所でタイミングよく「バァー」とい

採譜1  $\text{♩} = 76$  ぐらい

ハミング

採譜2  $\text{♩} = 138$  ぐらい

ハミング

採譜3  $\text{♩} = 100$  ぐらい

ハミング

採譜4  $\text{♩} = 78$  ぐらい

ふ ふん ふ ふん

採譜5  $\text{♩} = 78$  ぐらい

ふふん ふふん

採譜6  $\text{♩} = 78$  ぐらい

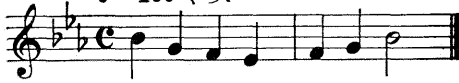
ふ ふん

った。|| 生後三百四十一日目のことであつたが家族がこの歌——その以前からよく歌ってきかせていた——を歌ってきかせていた時、タイミングよく「バァー」と一緒に言つた||

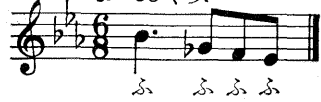
一年十一日目 「兎と亀」の第十五・十六小節目を無声音の「クッククッククック」にかえ、その他を旋律にのせてやると、とてもよるこんだ。四く五回歌っているうちに、この無声音の部分にくと一緒に歌うようになった。この部分だけを黙っても独りで言う。ピアノだけで弾いても同じ。

一年十六日目 採譜3の旋律を正しくまねた。何回でも楽に歌える。これを逆にした上行の旋律は数回繰り返して聞かせたが、ただ一度不正確に模唱できただけであつた。(この頃からせつけん箱を押して、部屋中を這いまわる)

採譜8 ♩=100 ぐらい



採譜7 ♩=58 ぐらい



一年二十一日目 生後三百十八日目から歌いだしていた採譜4の旋律が、採譜5のように変わった。玩具の「ニヤーン」をそのままの高さでまねる。

一年三十日目 「日本の子守唄」を歌うと、悲しそうな顔をして泣きだした。涙が激しく流れる。気嫌をなおした後 「中国地方の子守唄」を歌っても泣きだした。「日本の子守唄」を陽旋法で歌っても同じであった。ピアノで表情豊かに弾いても同じ。(ようやく立つことができた)

一年三十九日目 採譜6の旋律を歌っていた。

(一足・二足歩きかける)

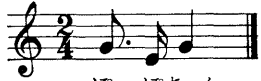
一年六十四日目 採譜7を歌っていた。(二語文に相等するものといえる。部分動機唱と名づけた。ババ、マンマ、ニヤンニヤンぐらいが言える。一人で歩くことができた)

一年七十六日目 ピアノをたたきながら採譜8を歌っていた。(語句に相当するものと判断、動機唱と名づけた)

ラジオで「テルテル坊主」の放送をきき、自分の頭をたたいていた。(風呂で「テルテル坊主」

♩=110 ぐらい

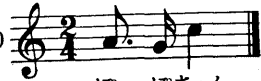
採譜9



ぼっ ぼちゃん

♩=110 ぐらい

採譜10



ぼっ ぼちゃん

を歌いながら頭を洗っている)

一年九十五日目 サイレン、子どもの泣き声、犬の鳴き声を同じ高さでまねる。

一年百十日目 名前をよぶと「ハイ」と答え、無声音でよぶと、無声音で「ハイ」と答える。一年百三十七日目 この頃ラジオで放送していた歌にあわせて、

採譜9、10を歌うようになった。(この日より四日後には、頭、鼻、口、ボンボン、チンチンをきくと、それぞれをおさえるようになる)

一年百七十日目 オルガンの高い音鍵をおさえては高い声を、低い方の音鍵をおさえては低い声をだす。音と声の高さはあっていない。(この日より五日後の身長は八十一・五センチ・体重十一・二キログラム) デンチャ・チチャ(汽車)、パップ(バス)、ハイヤー(乗用車)、アーター(痛い)などと言うことができ、家の中を走って逃げまわるようになる。

以上のことから、歌唱面では一年を過ぎた頃一オクターブの下行旋律、二音の下行のレガート唱ができ、一年三か月から一年六か月の間には、上行の旋律唱、少々高い音でも同じ高さでの模唱がで

採譜 11

ぼぼぼ ぼぼぼ ぼぼぼ ぼぼぼ ぼぼぼぼ ぼぼぼぼ  
 ぼぼぼ ぼ ぼ ぼぼぼ ぼぼぼぼぼ ぼ ぼぼぼぼ ぼぼぼ ぼぼ

き、さらには一動機ぐらいは歌える程にまで発達します。この外に一年二か月頃から小さい笛もふけるようになります。

鑑賞力は、一年目頃からは旋律が持つ感覚を味わえることができ、悲しい感じや楽しい感じの旋律に敏感になります。また聴きながら動作で表わすことを大変よろこび、手や足でタイムをとる（拍子を打つ）こともできるようになります。

4 一年半より二年まで

一年百九十五日目 童謡絵本（トッパン）の「兎と亀」の頁の絵を見て、「グウグウグウ」といながら持ってきた。（一年百五十二日目）に五冊買ひ与え、母が歌ってきかせている。したがって童謡の歌える部分だけ言う傾向は発達しながら続いている。たとえば

採譜 13

一年二百五十七日目 楽しそうに鼻歌を歌っていたので、採譜12を歌ってやると、採譜13を歌いかえた。（音楽語らいができると判断。この頃

採譜 12

「デタデタ」というように。

一年二百日目 採譜11の1〜6を歌うと、やや高さは違うが大体同じテンポで歌いかえた。7〜11に対しては、やや遅いテンポにはなったが正しいリズム割りで歌い返した。

二百九日目 童謡絵本を通しての歌の選択があらわれた。

一年二百十三日目 この日までに題名をいった童謡は前に述べたものの外、コンコンカアチャン（雨ふり）、メエー（めえめえ小山羊）、コイコイ（証城寺の狸ばやし）、コンコン（雨）、カアチャンカアチャン（肩たたき）、オテテオテテ（靴が鳴る）の合計十一曲であるが、言えないもので知っている曲がこれらのほかにあるかも知れない。（家族の着物類、茶碗、箸をまちがいなく見わけると）

一年二百二十三日目 「デタデタツキガ」まで言えるようになった

採譜 14



はまた「子守唄」を歌ってやると泣くが、自分が歌う時——最初の動機だけが歌える——は泣かない。二語文がいえだした。

一年二百六十九日目 採譜 13 のように歌っていた。同じように「鳩ぼっぼ」も歌っていた。

一年二百八十二日目 この日までに歌ったものは、前記の外に「靴が鳴る」の一小節「証城寺の狸ばやし」「汽車」である。

一年二百九十四日目 「靴が鳴る」のレコードを聴かせた。「オテテ、チャイデ、オイチョウケバ」と歌いだした。夜、叔父が玩具の乗物を隣の部屋で走らせていた時、それらの音を聞くだけで、「ハイヤー」(八台)「バブ」(四台)「キンチンチャ」——自転車——(一台)「チュククター」(一台)「コカック」(二台)を言いあて

ていた。ただ新しく買った消防自動車だけはわからなかった。この日より二日後、街でうしろからくる乗用車、スクーター、三輪トラックの音を次々と違わずに言いあてていた。

一年三百一日目 レコードを聴いている時間を計ってみた。一人でよくと十五分ぐらいが最高であるが、誰かがそばにいと一時間半もかけさせた。この間にヴァイオリンで奏される「ホラ・スタート」「無言歌一番」を聞かせたが、二面続くと飽きてしまった。(童謡絵本にある全曲を一節ずつ歌うようになっていた)

一年三百十三日目、童謡を大体正確に歌うようになったので声域をしらべた。カタカナ「ト」〜「ニ点ハ」であった。この域より高い音は裏声です。

生後二年までに曲名と結びついた器楽曲は次の通りである。カッコ内は便宜的につけた名で、付記は身体的反応である。

時計屋の店(時計)、おもちゃの兵隊、森の水車(水車)——くるくる手をまわす、森のかじや(かじや)——拍子にのって体を動かす、楽しいそりの遊び(遊び)、軍艦マーチ(お船)、小鳥屋の店(小鳥)、カッコワルツ(カッコ)、アメリカンパトロール(パトロール、パトロールカー)——ひぎにのったり抱かれたりして、体を上下に動かす、皇帝円舞曲(皇帝)、——この曲の外に、ヨハン・シュトラウスの曲をきくと、皇帝といっていた。以上二十四曲である。「ガボット」と「アンネンホルカ」の二曲は、曲名と結び

つかなかった。

以上の資料から一年半を過ぎる頃には、ふつうの速さの三連音符やスキップが歌えるようになります。話しことばよりも歌詞によって歌う言葉の方が幾分早く発達し、声量(資料ではあらわせませんが)も増してきます。またレコードその他で聴いた効果が早く現われ、部分模唱から短時間提示した旋律および歌詞の模唱や、簡単な問句に対し答句を歌ってかえす音楽語らいもでき、童謡もいくつかは歌えるまでに発達します。正常な咽喉状態の幼児なら一オクターブか一オクターブ半ぐらいの声域を持つようになるでしょう。

鑑賞部門では、旋律が持つ表情を聴きわけける力や、聴きながら動作で表現する面がさらに発達します。この期間は全く耳(聴覚)がよい時期で、身近のいろいろな音を聴き分ける能力もできてきます。

一年九か月頃からは器楽曲を能動的に聴くようになり、ついには簡単な描写音楽の曲名がおぼえられるところまで発達するのです。

## 5 二年より三年まで

私のみた事例では、この間の興味は話し言葉に片寄り、さらに体の発達とともに玩具遊びに夢中になり、音楽面の発達は余りありませんでした。以下紙面の関係もありますので事例を省略して述べることにします。

二年一か月頃には、一秒の中に四つ打つくらいものが歌えるようになります。

二年二か月頃には、遊びの中で自分の言うことばに即興のメロディーをつけるようになり、欲求不満の時にもその欲求に旋律をつけて、情緒的爆発から避けようとする傾向もできてきます。

二年三か月頃から規則的な振動をだすもの(楽音に近いもの)を次々とたいて比べ、喜ぶ傾向があらわれます。

二年半頃には、耳に入る童謡などはすべて知りつくす(全部歌えませんが)程に発達しますが、和音感教育などを受け入れる能力はまだありません。

二年七か月頃には抒情的な日本歌曲を好むようになります。

二年九か月でも工場の騒音などには、極度の恐怖感を抱きます。

二年十か月では、地声・裏声を使って器楽曲をセンスよく歌えるようになりますが、ステレオなどで音量を極度に上げると恐ろしがつて泣きます。この状態はまだ数か月続きます。しかし総体的に二才児の興味はこの頃の最初に述べた通り、言葉や遊び、さらには体の発達と相まって絵など音楽以外の面に向くものといえます。

## 6 三才児について

三才をむかえた頃から、再びピアノや木琴などをたたきたくなくなり、レコードによる器楽の鑑賞も再び望むようになります。

三才二か月頃には四〜五分ぐらいの曲は、一度きけば知っているといえる程おぼえる能力を持ちます。(模唱はできませんが……)

三才三か月頃には、抒情的な日本の歌曲(時計台の鐘・この道な

ど)を、母親と一緒に歌うところまで発達します。三才半を過ぎると、生後この頃まで急激に発達した聴覚を通しての発達は、ゆるい斜面を登るように、静かな発達に変わるようです。しかし三才半過ぎからは、ソルファ(移動による階名)と旋律が結びついて歌えるようになりますが、このことから読譜や演奏などの教育ができる年令に達したとは断定できません。

日本が生んだ世界的なヴァイオリニスト、江藤俊哉氏が三才児であった頃、ソナタやシンフォニーなどのレコードを(どうして選びだすのかわからないとの御尊父の言)自分で持ってきて、かけて欲しいと欲求したそうです。三才半以後は純粋器楽曲を追々と好むようになります。酒田富治先生も先生の御嬢様の事例からシンフォニーなどを鑑賞曲として与えるのが良いと述べていられますが、特別な音楽的環境に恵まれた場合や、才能の優れた人の場合に、本人がそのような曲を望むこともでてくると考えられます。この

状態は理想的なものです。一般的にこの年令ではリズムやハーモニーの簡単な構成による楽曲を与えるのが、幼児の興味や発達に即したものと見えましよう。

以上、できるだけ具体的に乳幼児の発達を六つの段階に分けて述べてみました。現在まで私が接した文献では乳幼児の音楽的な発達を細かく具体的に示されたものがありませんでした。ため、一応自己流ながら試みた次第です。心理学者の説によりますと、人間の耳の最も良い時期は三才までであるといわれています。私の観たのもこの説に合っているようですが、このような事例研究がさらにどなたかの手によって、より多くだされることと、不備な私の研究を補い、かつ指導していただきたく望んでおります。最後にこの私の研究は、すでに故人となりました元大阪市立大学教授中西昇先生から、心理学者としての多大の御指導と助言を賜わって完成しましたものです。先生への感謝を新たにしつつ稿を閉じることに致します。

〔大阪市立大学〕

## 幼児の教育 第六十四巻 第七号

七月号 © 定価六〇円

昭和四十年六月二十五日 印刷

昭和四十年七月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。